

## あとがき

今年も、2008年7月に開催された第3回社会鍼灸学研究会の論文集をここに上梓することができた。本号からは、発表者の論文を加え、松田博公氏と戸ヶ崎正男氏に気迫のこもった論文（まさに玉稿）を寄稿いただき、非常に濃い内容で質の高い論文集になった。また、第3回の「討論の部」では、形井氏の進行のもと、小野氏を中心にした発表者のディスカッションが活発で、活字として残すのにふさわしい内容になっている。

伊藤氏の研究は斬新で鍼灸研究の質的研究の一つの方向性を示唆しており、小野氏は京大における鍼灸経済学的な奥深い研究を元に発表され、控えめではあるが斯界への提言が多く盛り込まれていると同時に、鍼灸の制度や本質所以の限界を暗示している。津嘉山氏の鍼灸を見つめるスタイルはいつも独特で、そのまなざしに魅了されているものもいる。

しかし、我々の活発なディスカッションとは裏腹に、鍼灸を取り巻く社会状況は百年に一度の恐慌でさらに厳しく、鍼灸市場の先行きにも明るさは見えてこない。また、鍼灸の新設専門学校や新設大学の活気もころなしか低調で、08年の大学院大学の閉鎖とともに暗い影をしのばせている。松田氏の論文は刺激的で挑発的でもあるが、〈伝統医療〉は「魔法の呪文」なので、息詰まった斯界の解決方法はもうマジックしか期待できないのかもしれない。否、もしや日本鍼灸が近代から呪文をかけられたのではあるまいか。

一方、現代の「現場」取材してみると、鍼灸の良さを体感もしくは実感したうえで、鍼灸を大切にしている鍼灸師が、優れたヴィジョンを持って活動していることもわかる。今後、様々な観点で現場レポートをかさね、斯界に還元することに加え社会鍼灸学研究に活かしていきたい。

鍼灸という不思議な社会現象を探るのに手の届きそうな範囲から紐解き、現代日本の鍼灸と未来の日本鍼灸を語るには近代の検証が欠かせないと考えてきた。まだまだ研究途上であるが、近代以降の日本鍼灸の変遷をマクロにみると、「制度の有無」が大きな障壁になっていることが分かるのだが、近代の斯界の念願であった「専門学校の設立」は戦後になってやっと叶い、現代になって鍼灸大学、大学院へ昇華したことは「進展」ともいえる。

本拙論の研究途上で駒井一雄の『東邦医学』にたどり着くことができ、近代後期の斯界に対する駒井の多大な功績を初めて目の当たりにした。臨床や研究のみならず制度に関する涉外、人材（竹山晋一郎）の発掘といった幅広い駒井の活動は、日本鍼灸を語るうえで素通りすることはできない。適切な場での一定の検証が必要であると考え。この時期、特に昭和初期の鍼灸の社会学的な側面を記述している文献は少なく、上地栄の『昭和鍼灸の歳月』が当時の様子を比較的よくレポートしていると考え、戸ヶ崎氏の論文は上地文献の再検証としても大変興味深く、今後の言及が楽しみである。

この論文集が皆さんのお手元に届く頃には、第4回の実施要綱も固まっているはずであるし、記念すべき第5回への方向性も見えつつある。

今回も、研究会を陰で支えてくれた筑波技術大学附属東西医学統合医療センターのスタッフの皆さん、本当にありがとうございました。

大型連休から日本中が振り回された新型インフルエンザの報道が鳴りを潜めつつある新緑皐月。

